

明治家 実業列伝③

伊達 邦宗

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野 正道



仙台白菜の誕生

近年、地場の伝統野菜が注目を集めています。宮城県でも、曲がりねぎや芭蕉菜など、いろいろな伝統野菜がありますが、なんとと言ってもその代表格は仙台白菜になるでしょう。

仙台白菜の起源は、中国に出征した兵士が、現地で食べた菜の種を持ち帰ったものと言われています。しかし、持ち帰った種から育てた時はうまく成長したものの、二代目、三代目となると同じようには育たず、栽培はなかなか安定しませんでした。

これは、白菜はアブラナ科に属し、他のアブラナ科の植物（ダイコンやナズナなど）と交雑しやすいという性質が原因でした。この



明治41(1908)年ごろの伊達家養種園(『養種園沿革概要』より)

特徴を解明し、他のアブラナ科の植物の花粉が混じらないように、島で栽培したものから種を採る手法が採用されてから、宮城県での白菜生産は軌道に乗り、その品質のよさもあつて、大正十年代以降、「仙台白菜」の名で全国に出荷され、たちまち高級食材としての地位を確立したのでした。

実験農場・養種園

仙台白菜が高級食材としてのブランドを確立させる過程では、宮城県農会、宮城農学校、民間採種業者、生産者、そして運送を担当した仙台鉄道管理局などによる、さまざまな工夫と努力があつたのですが、中でも記憶されるべきは、伊達家養種園が果たした役割です。伊達家養種園は、明治三十三(一九〇〇)年、現在の仙台市若林区役所の敷地一帯に作られた実験農場です。東北地方の農業や畜産業の改良を図り、この地に適した品種の作物を研究し、良質の種や苗、家畜を廉価で農家に普及させることを目的とされていました。

設立したのは、明治三年に第十三代仙台藩主伊達慶邦の子として生まれた邦宗です。若くして英国のケンブリッジ大学に留学して経済学を学んだ邦宗は、地域に貢献する事業を実現させたいと考えていました。その邦宗が着目したのが、東北地方の基幹産業であつた農業でした。その頃は全国的に農業技術の改良を目指す動きが盛んで、宮城県でも県や市町村、そして農会や農学校が連携しながら技

術改良に努めていました。邦宗は、本格的な実験農場を開設することにより、さらにそれを後押しする役割を果たしたのでした。

養種園では、優秀な農業技術者を職員として雇用し、国内外からさまざまな品種を導入し、栽培実験や増殖、普及に努めました。仙台白菜も、養種園での栽培実験や品種改良があつたからこそ、宮城県の特産品として全国的に知られるようになったのです。

地域への貢献

伊達邦宗は、大正六(一九一七)年、兄の宗基の跡を継いで伊達家の当主となりました。

当時、伊達家は経済的に困難な時期にあり、邦宗が家を継いだ前年には、多くの美術品を売立に出したりもしていました。しかし、その売却代金をもって山林を購入し、計画的に樹木を伐採する方策を立てることにより、伊達家も経済的に一定の安定を得るようになったようです。また当主にはなっていないかもしれませんが、ケンブリッジで学んだ邦宗の経営学の才が発揮されたのは間違いないでしょう。

一方で邦宗は実業の面だけでなく、「松洲」という号を持つ文化人としての一面もありました。伊達家や仙台の歴史を調べ、資料を収集し、『伊達家史叢談』という大著にまとめ、また実業書や文学書などさまざまな書籍を集めるなど、大正十四年に没するまで文化面での活動も大きなものがあつました。

養種園は、第二次世界大戦後、仙台市に移管されました。実験農場としての機能も持ちながら、一種の植物園として市民に親しまれ、その伝統は、仙台市農業園芸センターに引き継がれています。伊達邦宗の地域貢献への志は、形を変えながら脈々と生き続けているのです。

※肖像写真は、伊達家伯記念會所蔵

仙台市史

好評発売中

通史編7 近代2

大正、昭和戦前期の仙台を1冊に凝縮

◆A5判 585頁 オールカラー ◆定価3000円(本体2858円)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館・鎌宮城県教科書供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183

お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074



岩切駅における仙台白菜の出荷風景(昭和14年10月7日付け「河北新報」)
大正末期から昭和10年代まで、仙台白菜は全国に出荷され、みずみずしい柔らかさで大評判に!